P-3-59

クラウドサービスを利用した問題配信による学習支援の実際と効果

諏訪赤十字看護専門学校　教務部

○浜（はま）　夏子（なつこ）、石橋　絵美

【はじめに】看護専門学校の受験者数は減少傾向にあり、入学生も多様化、学力・学習習慣の個人差も大きい。入学後から始まる解剖生理学の知識は、後の学習の基礎になるが、知識の定着は難しい。今回、看護における基礎知識向上、学習習慣の確立、を目的にICTを使用したクラウドサービスを導入し、学生のスマートフォンへの問題配信を開始した。取り組みとその効果について報告する。【対象】看護専門学生1年生　41名【実際】5～8月は配信に慣れる目的で高校までの国語、数学の問題を週2回配信。9月からは基礎知識向上を目指し、解剖生理学の問題を週3回配信。問題は、授業の進度に合わせ教員が作成し選択問題とした。学生は回答と同時に正答を確認できる。教師は、回答状況を確認し声掛けや面接を実施。7月と12月にはアンケートを実施した。配信には教員1名が担当。【結果】回答率が80%以上だった学生は、41人中、4～7月では38.5名、9月～3月では、35名であった。基礎科目学科試験の結果をクラウドサービスを利用しない学年と検定を実施。8科目中4科目で有意差が見られた。また、解剖生理学模試においても有意差が見られた。アンケートでは、「定期的な配信が学習の習慣化に役立つ」「試験対策問題が自己学習に役立つ」「回答後に復習・やり直しをする」「解剖生理の知識がついている」といった回答があった。【考察】回答率は高く配信問題への取り組みは習慣化している。アンケートからも、復習・自己学習に繋げられ、学習に役立てている。「解剖生理の知識がついている」と感じている。知識の向上については、学生の実感とともに、学科試験、模試の結果からも有意差が見られ、有効であったといえる。【課題】今後は、回答率が低い学生のサポート体制・学習状況に合わせた効果的な配信を検討する。

P-3-60

A看護専門学校における卒業時看護技術到達度の評価

さいたま赤十字看護専門学校　看護学科

○鈴木喜美子（すずききみこ）、広瀬　聡子

【目的】平成21年度カリキュラム改正以降の卒業時看護技術到達度の達成状況を明らかにし、技術・実習指導の評価とする。【方法】対象：平成23～30年度卒業生290名。厚生労働省の示す「看護師教育の技術項目と卒業時の到達度」（13領域142項目）を基にした「看護技術経験表」を各実習終了後に自己評価し、卒業前に改めて看護技術評価表を配布し最終的な到達度をデータとした。本研究は所属施設の倫理審査を受けて実施した。【結果】13領域の項目では「食事の援助技術」83.9%「呼吸環境を整える技術」85.5%、他は90%以上の高い達成状況であった。80%未満の技術は、到達度1（単独で実施）34項目中4項目、「経管栄養を受けている患者の観察」48.5%、「患者に合わせた便尿器選択」68.0%、「災害が発生した場合指示に従って行動できる」71.3%、「酸素吸入療法を受けている患者の観察」74.0%であった。到達度2（指導の下で実施）では54項目中9項目で、「気管内加湿ができる」34.9%、「経鼻胃カテーテルからの流動食の注入」48.9%「直腸内与薬の投与前後の観察」55.1%、「酸素吸入療法が実施できる」72.8%などであった。到達度3（学内演習で実施）は21項目中、「モデル人形への直腸内与薬」67%「体位ドレナージ」75.1%の2項目であった。逆に、到達度100%の技術は、到達度1「患者を車椅子で移送できる」、到達度2「臥床患者の体位変換ができる」「入浴の介助ができる」「陰部の清潔保持の援助ができる」の4項目であった。【考察】13領域は80%以上であり高い達成状況と言える。しかし50%未満の技術で「気管内加湿」は経験する機会が少ない。「経管栄養の観察」と「流動食注入」は、実習での経験を学生と臨床に促す働きかけが更に必要である。学生は幅広く経験しているが全員が達成できる技術は限られており、改めて経験することの重要性を認識できた。

P-3-61

学生の社会人基礎力を高める取り組み 生活全般に活用できる行動指標の検討

姫路赤十字看護専門学校

○小野（おの）　真弓（まゆみ）、山田　道代、内海　尚美、松井　里美、神戸真由美、藤田美佐子、藤元由起子、中林　朝香、八幡　宏美、石谷　尚美、森下　裕子、木本菜見子、坂本佳代子、柳　めぐみ

看護基礎教育では専門職の育成を目的としている。技術的な問題については、入職後に身につけることもできるが、それだけではなく基礎学力の他、社会に適応できる能力が求められる。しかし、仕事をしていくために必要な基礎的な力を備えていない人が多いと言われている。2006年に経済産業省が打ち出した「社会人基礎力」は、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」と定義され、人を対象とし、チームで業務を遂行する看護職にも求められる能力である。
当校では2015年より、臨地実習の態度評価に「社会人基礎力と行動指標」を取り入れ、社会人基礎力の育成を行っている。しかし社会人基礎力は、実習だけで身につくものではなく、学生生活全般でも身につけていくことができると考える。そこで、1. 学生が普段の生活の中で「自分のできていること、できていないこと」を意識できる、2. 教職員の関わりの意味づけや関わり方の意思統一を図る、ことを目的に当校全教職員対象に調査を行った。経済産業省から提示されている3つの能力、12の能力要素に、岐阜大学医学部看護学科が倫理性を加えて作成された、「4つの能力・13の能力要素、定義、意味」を参考に、「実習以外の学生生活場面での望ましい姿・行動」について、教職員14名の意見を抽出した。更にカテゴリーに分け、教職員が期待する行動指標を会議で話し合った結果、13の能力要素に対して、実習以外の生活場面での行動指標を検討することが出来た。今後は指標を用いて、学生生活でも社会人基礎力を育成できるよう、学生に関わっていきたいと考えている。

P-3-62

成人看護学実習における学習会の一工夫 ～既習の知識を実習で活用する～

諏訪赤十字看護専門学校　教務部

○有賀（あるが）ゆかり、登内　秀子

【目的】3年次に行う成人看護学実習3では、慢性期・終末期にある対象者の看護を学ぶ。実習を展開する上での課題が2つあった。1）成人期の対象者が少なく、このライフサイクルならではの看護を、実践から学びにくい。2）机上の学習だけでは慢性期・終末期にある対象者のイメージが持てず、看護実践の根拠が浅い。1）2）に関して、既習の知識を実習で活用する力を向上させることを目的に、学習会の改善に取り組んだ。【方法】対象および学習会の方法：A看護専門学校　3年生　40名慢性期・終末期の特徴・生活への影響・必要な看護や疾病によるライフサイクルへの影響をテーマにした事前学習プリントを配布し、学生は実習までに学習してくる。実習初日と2日目に事例を用いながら、疾病によるライフサイクルへの影響を考えることを目的に学習会を行う。事例の患者にとって今後介入が必要と考えられる部分に線を引き、それぞれが行ってきた事前学習のどの部分と合致しているかを考え、発表し合いディスカッションを行う。調査方法：2日目の学習会終了時と実践を終えた実習終了時に学生にアンケートを実施し、分析・考察した。【結果・考察】アンケート結果からの考察は4つである。1）社会像をとらえる視点が広がった。2）社会的側面に何を援助するか考えるきっかけになった。3）理論を土台に看護実践を考えるきっかけになった。4）事前に学習したことを活かす方法がわかった。【今後の課題】看護実践中または看護実践が終了したタイミングで、最初の学習会の内容と看護実践へのつながりを確認することで学びが強化される。しかし、今の実習スケジュールでは、学習会を入れる時間的余裕がない。何を学ぶのかを洗練し、さらなる学生の学びの深化を目指して、学習会授業案を改善していきたい。

P-3-63

多発性硬化症との鑑別が必要だった白質病変を伴う片頭痛の２例

長岡赤十字病院　研修医

○古山（ふるやま）　海斗（かいと）、梅田麻衣子、勇　亜衣子、林　　秀樹、大津　　裕、梅田　能生、小宅　睦郎、藤田　信也

【症例】症例1：39歳男性．小学生から前兆を伴わない片頭痛があった．某日，複視を主訴に近医脳神経外科を受診した．左外転神経麻痺があり，頭部MRIで多発白質病変を認め，多発性硬化症を疑われて当科を紹介受診した．髄液所見は正常で，頭部MRI造影所見からは，時間的多発性は証明できず，多発性硬化症に特徴的な脳梁病変や大脳皮質の皮髄境界病変は認めなかった．特発性外転神経麻痺と片頭痛に伴う白質病変と考えた．症例2：34歳女性．高校生から閃輝暗点を伴う片頭痛があった．某日，左視力低下を自覚したが1週間で自然に回復した．その1ヵ月後に頭痛があり近医神経内科を受診した．頭部MRIで大脳白質に多発する高信号病変を認め，多発性硬化症を疑われて当科を紹介受診した．眼科的に異常は指摘されず，髄液所見は正常であった．その後6年経過を診ているが，臨床的にも画像上も再発はなく，片頭痛に伴う白質病変の可能性がある．【考案】片頭痛のある患者に多発白質病変を認めた2症例について検討した．片頭痛における白質病変の有病率は4～59%と報告されているが，臨床的意義は不明である．多発性硬化症の診断には，McDonald診断基準が国際的に広く用いられている．他の疾患を除外し，MRI基準を満たせば多発性硬化症と診断することが可能であるが，非脱髄性T2高信号病変を脱髄と認識し，誤診する可能性がある．多発性硬化症の診断には，片頭痛も含めた他の疾患の除外が重要である．

P-3-64

海外への帰国搬送に難渋した急性腎不全合併のコンパートメント症候群の一例

沖縄赤十字病院　医局

○宮城（みやぎ）　加奈（かな）、那覇　　唯、赤嶺　盛和、大湾　一郎、新城　　治

【緒言】沖縄県は観光立県で去年の外国人観光客は300万人と過去最高を記録、それに伴い、外国人の受診も増加している。今回、海外への帰国搬送に難渋した一例を経験したので報告する。【症例】22歳の健康な韓国人女性で、主訴は両下肢疼痛と血尿、眩暈。那覇マラソン参加目的に入国した。大会当日は晴天で、最高気温は26.3度を記録。走行中、両下肢に脱力と疼痛を感じたが4時間程で完走、直後に下肢疼痛と23時より血尿が出現した。翌日の空港への途中で眩暈を訴え歩行困難となり当院へ救急搬送。来院時、意識清明で各vaital signsは維持され、両下腿に把握痛あるも足背動脈は触知でき冷感はなかった。主な検査所見はBUN 37.7mg/dL、Cre 1.23mg/dL、CK 743510 U/Lであった。横紋筋融解症の診断で入院、輸液を開始した。第2病日から下肢の疼痛と腫脹が悪化し、コンパートメント症候群の診断となった。尿量は次第に減少しCreが上昇、CKは低下せず第3病日に無尿となり、胸部単純にて肺うっ血を認め透析を開始した。同日午後には左足関節の背屈が不可となりチアノーゼを認めたため、筋膜切開術を施行。CKは透析開始後に減少したがCreは第11病日まで上昇し無尿も持続した。入院費が高額となっていくが為、早期の帰国を手配。航空会社と交渉し、搭乗に際の条件をクリアするために調整した。帰国後の転院先は父親が手配した。入院期間の通訳業務は在日の韓国民団がサポートしてくれた。車椅子で移動可となり第15病日に退院。空港までは看護師が付き添い、搭乗中は父親が介助し無事帰国した。帰国後、父親から「透析は離脱し第45病日で退院、現在マラソンを再開している。」と連絡があった。【考察】今回の経験から、外国人患者受け入れ時や帰国搬送の調整に関する当院の取り組みを紹介したい。